

## 2020年春闘アピール

### 70年の歩みをとめず、職場からたたかい期待と要求をかなえる 2020年春闘

#### 組合員のみなさん

世界経済は、米中貿易戦争や英国のEU離脱問題が一息ついたとはいえ今後も予断を許さず、加えて中東情勢、各国の金融政策の動向や勃発する反政府デモによる政治的混乱など、いまだに多くのリスクを抱え、先行き不透明な状況は続いています。

日本では、戦後最長の景気拡大局面と言われてはいますが、不透明な世界経済の動向から日本経済の先行きも不確かなものとなっています。多くの国民・労働者にとって景気回復は実感が持てないまま、増税や社会保障費の負担増、実質賃金の低下による将来不安の高まりが個人消費を停滞させています。これまで莫大な利益をあげてきた大企業の業績にも停滞感が強まり、各種経済指標が下振れするなか、地域経済や中小零細企業の経営は厳しさを増しています。そして、日銀の金融緩和策は、“国の借金の肩代わりと株価買い支え”となり、マイナス金利政策が負の影響をもたらすなど、その行き詰まりは明らかです。

それでもなお、自らの経済政策を自画自賛する安倍政権は、国会における「数の力」を背景に、アメリカ、財界の要望を受けた成長戦略を乱暴におしすすめています。経済政策の一環として「働き方改革」をすすめる、法人税を引き下げ一方で消費税を引き上げ、社会保障改悪をすすめるなど、国民・労働者には暮らしや働き方、雇用への不安がひろがっています。また、“モリカケ問題”にはじまり「桜を見る会」などでは説明責任を果たさず、国会・国民軽視の姿勢が明らかとなり、平和と民主主義を破壊する動きも引続き強めています。こうしたなか安倍首相は、今年も財界に対して7年連続となる賃上げの要請を行っていますが、財界は、賃金引上げの必要性は認めつつ横並びの春闘を否定し、雇用体系や日本型雇用制度の見直しを強調しています。

損保では、相次ぐ台風や集中豪雨など、自然災害の大規模化・甚大化が業績に大きな影響を与えています。そして、不安定な経済動向に加え、国内市場の縮小やIT化、技術革新に伴うビジネスモデルの変化など、事業環境は先行き不透明なことから、損保経営の危機感は、企業規模の大小を問わず依然として強くなっています。そのもとで、大手社は、国内でのマーケットシェア競争を激化させ、海外事業の拡大や新規事業領域の推進などによって収益の拡大をめざし、中小社はそこに巻き込まれ、「収益力の強化」「合理化・効率化」「労働生産性」を追求する動きが強まっています。よって、今春闘でも、各経営は厳しい姿勢を顕わにし、検討にあたっては慎重な出方を示してることが容易に想定されます。

そして、損保の職場には、これらの歪みがおしつけられ、損保の社会的役割と働くものの誇りと働きがいの喪失という被害もたらされています。2020年春闘アンケートでは、会社、賃金、働き方、雇用など、産業と職場、生活と処遇、将来に対する不安が大きくなっていること、そのもとで不満が広がっていること、その一方で、職場の切実な現実、生活・労働実態の改善への非常に強い思いや声は強まり、私たちの将来を確かなものにしたという要求と労働組合への期待が高まっていることが明らかとなっています。各経営にとっても、その真摯な主張には耳を傾げざるをえず、私たちは、確信をもって、働くものの声と思いをしっかりと主張していく春闘をたたかうことが大事になります。

#### 組合員のみなさん

2020年春闘は、損保産業の明日が不確かな時代に、とりまく情勢に真正面から向き合い、組合員一人ひとりの声と思いを大切に、経営の一方的な出方は許さず、その手に委ねることなく、自らの手で私たちの生活と職場を守り、確かな明日をつかみとるためにたたかう春闘です。私たちはこの春闘で、

○各支部・独立分会の課題とたたかいを全体で共有し、それぞれの理解と納得を大事に、全組合員の知恵と力を結集して、ともに全損保統一闘争をたたかいます。

○これまでの春闘の到達点に立ち、労働組合の力と可能性に確信をもち、共感を広げ主張と団結を力に、たたかいを職場から構築し、主体的にすすめます。

○とりまく情勢、経営の出方を冷静に見定め、直面する課題、もたらされる事態には真正面から向き合い、「生活と雇用、労働条件を守る」という不動のスタンスのもと、職場の現実と思いに寄り添い、そのときどきに最も求められる労働組合の役割を追求します。

全損保統一闘争のもと、すべての組合員が70年の歴史を持つこの労働組合に結集し、その歩みをとめず今をただし職場からたたかい、期待と要求をかなえるため、この春闘をともにたたかうではありませんか。

2020年1月25日

全日本損害保険労働組合 支部独立分会代表者会議